

備後国太田荘政所寺院の興亡

—今高野山の歴史・住侶・文化財—

蔵橋 純海夫

はじめに

- 一 政所寺院「今高野山」の誕生とその興亡
- 二 今高野山の住侶
- 三 今高野山の文化財について

論文要旨

備後國太田荘は、永万二年（一一六六）平清盛の子重衡によって後白河法皇に寄進され院領莊園となつた。その後平氏滅亡により、同荘は文治二年（一一八六）後白河法皇から高野山根本大塔領へ寄進され、以後室町時代に至るまで高野山領莊園の一として続いた。高野山施入当時の莊田面積は、約六一三町歩年貢米一八三八石余を出す大きな莊園であつた。

さて、紀州高野山には、備後太田荘に係わる当時の文献資料が多数伝えられており、一九〇〇年代の初め頃から今日にかけて、莊園經營や文化財等に係わる論考が諸賢によつて多数発表されてきている。しかしながら、太田荘の政所寺院としての性格をもつ今高野山についての研究は、一部の文化財や天然記念物等に係わつてあるのみで皆無に等しい。

そこで本稿は、広島県史跡「今高野山」の興亡の歴史と住侶及び文化財等についての概観をまとめたものであるが、今高野山に関する在地の中世資料は度

重なる災禍によつて消滅し、勢いその解明は高野山文書や寺外に伝わる文書及び寺内に伝わる文化財等に僅かに記された刻銘や墨書き、後代に書き記された寺の縁起などによってしか手がかりがつかめないため深く追求していかない。

本報告は初めに今高野山の誕生と興亡の歴史を辿り、ついで住侶についての考察、文化財の概観について述べ、終わりに今高野山の歴史年表、歴代住職一覧表、その他今高野山に伝わる古記録等を資料として収録したものである。